

発掘調査の概要

藤原宮跡大極殿院回廊の調査（飛鳥藤原第160次）

2009年7月から開始した大極殿院回廊の調査では、回廊および関連する遺構を確認したあと、藤原宮の造営に関わる遺構を追求するため、10月より大極殿院内庭や朝堂院朝庭に敷かれた礫を一部取り外し、下層遺構の調査をおこないました。

昨年度の朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第153次）では、藤原宮の中軸のやや東を南北に通る幅4m、深さ2mの運河が、大極殿院南門の南において方向を変え、北東方向へ延びる幅約2m、深さ0.7mの斜行溝として、掘り直されたことが判明しました。

今回の調査では、この斜行溝が南門を避け、南北溝（幅3m、深さ1.2m）として北へ延びていく状況が明らかになりました。さらにこの南北溝は、回廊の南において回廊建設地を避け、東西大溝（幅3.5m、深さ0.9m）へと付け替えられていました。

これらの運河、斜行溝～南北溝、東西溝は、資材運搬や排水を目的として掘られたと考えられます。これら遺構の前後関係から、大極殿院南門近辺の造営過程がより具体的にわかってきました。はじめに運河を利用して、遠方より朝庭部分に資材を運び込みます。そして南門を建設する際には、運河を埋め立て、斜行溝～南北大溝として掘り直します。次いで回廊を建設するため、回廊以北の南北大溝を埋め立て、東西大溝に付け替えます。最後に、造営に使われた溝を全て埋め立て、朝庭の広場部分を造成し、礫で舗装する、という順序で造営されたようです。

調査中は、藤原宮跡に蓮やコスモスの咲く時節で、調査地にも多くの皆様が立ち寄られました。また、去る11月29日の現地説明会では、950人もの方々にお越しいただき、大変盛況となり、一同感謝しております。（都城発掘調査部 高橋 知奈津）



調査区全景（西から。右のL字溝が造営期の大溝）

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第159次）

キトラ古墳周辺の国営歴史公園の整備にともなう檜隈寺周辺の調査も2年目を迎えました。今回の調査は檜隈寺のある丘陵の東裾部に5ヶ所、講堂の北西に1ヶ所の調査区を設け、調査をおこないました。

やまとのあやうじ
東漢氏の氏寺である檜隈寺はキトラ古墳の北西約600mに位置し、これまでの調査で、塔・金堂・講堂などの主要伽藍が確認され、西を正面とする珍しい伽藍配置が明らかとなっています。

丘陵裾部の調査区では、掘立柱建物6棟、総柱建物1棟を確認し、それらの建物が東西や南北方向にのびる堀によって区画されていたことが明らかになりました。また、建物や堀が建っている平坦地は、東へ落ちていく丘陵の裾部を整地して造成されていたことがわかりました。これらの建物や堀の柱筋の方向は丘陵の方向とほぼ並行しており、地形に合わせた建物配置がなされていたようです。さらに調査区内では、しょうせい焼成遺構やふいごほぐち轆轤口など工房の存在を示す遺構や遺物を確認しており、檜隈寺に附属する施設であった可能性が考えられます。これらの生産関連遺構・遺物は丘陵の反対側にあたる西裾部でも見つかっており、丘陵全体が寺院地として利用されていたことがわかります。

今回の調査で、丘陵の上に主要伽藍が並び、丘陵の裾部に倉庫や工房などの諸施設が、丘陵をぐるりと囲むようにして配されていた檜隈寺の姿が浮かび上がってきました。（都城発掘調査部 若杉 智宏）



丘陵東裾部の東西堀（東から）